

大学通信教育部における社会福祉援助技術現場実習指導の留意点

— 通学及び通信課程の学生への調査の比較を基に —

高 橋 昌 子

Important considerations at the guidance of social work field practicum in a correspondence course of university

— based on the comparison of investigations to the students in the correspondent course and on-campus course —

Masako TAKAHASHI

要 旨

社会福祉士養成課程を有する大学での通信教育において、社会福祉援助技術現場実習指導での留意すべき点を明らかにすることを目的に調査研究を実施した。A大学の通信教育及び通学課程で、高齢者福祉分野を実習先に選択したのべ22名の学生を対象に、実習生の特性・特徴、実習時の評価、実習時の指導点や相談内容、所持する資格等について調査し、両課程の学生を比較することにより、通信生に特に留意すべき点を明らかにした。通信生の多くは社会人であり、すでに関連する資格を取得している学生も多く、実習指導においては、以下の点について留意すべきである。①実習生としての自覚をもち実習での学びを深めるため、自身の職場での実習は避けた方がよい。②社会人経験や就労経験が実習生としての良好な特性として実習に活かせるよう指導する。③身だしなみや言葉遣い等、基本的な指導を怠らない。④心身の健康の留意と家庭や職場などの理解により、実習実施の環境整備を進める。⑤実習日誌に関しては、通学課程と同等またはそれ以上に、事前指導と事前学習が必要である。

キーワード：現場実習指導、通信教育、大学生、社会人

1. 研究の背景

18歳人口の減少は受験生の減少をもたらし、大学教育に携わる者にとって大きな悩みとなっている。一方、18歳以上あるいは社会人経験者に対する生涯教育は広がりを見せており、大学の通信教育で学ぶ学生も増加している。平成17年度の学校基本調査報告書（2005：17）によれば、通信による教育を行う大学は42校（うち通信制の学部を置く大学35校、大学院を置く大学19校）、短期大学

は9校で、前年度より大学は3校増加（通信制の大学院を置く大学は1校増加）し、短期大学は同数となっている。また、学生数は大学24万6千人（男子10万2千人、女子14万4千人）、短期大学2万8千人（男子8千人、女子2万人）で、前年度より大学は4千人、短期大学は2千人増加している。これらの学生の年齢は大学を例にとると18～22歳が10.1%にすぎず、23～29歳24.3%、30～39歳30.6%、40～49歳17.3%、50歳以上17.7%であ

り、通信教育の学生の多くが通常の高等教育年齢を超えた、いわゆる社会人であることがうかがえる。

社会福祉の分野においても通信教育が提供されており、たとえば、2008年の日本社会福祉教育学校連盟の会員名簿によると正会員147校のうち7校、準会員27校のうち1校で通信教育課程が設置されている。また、わが国の少子高齢社会に対する一般的な関心の高まりや、福祉ニーズへの専門的な対応の必要性、および国家資格取得希望者の増加などを背景に、社会福祉士の受験生が年々増加しているが、(財)社会福祉振興・試験センターの社会福祉士養成施設一覧によれば収録されている短期養成施設及び一般養成施設52施設のうち37施設で通信教育課程が設置されており、社会福祉士の養成においても、社会人を対象とした通信教育が大きな役割を果たしている。

社会人に対する生涯教育の重要性と、その実施形態の一つである通信教育の意義・利点については、これまで多くの研究がなされている。白石は、社会人が大学に何を期待しているのかをリカレント型とパイディア型とに分けて次のように述べている。「リカレント型というのは、教員免許状、学芸員、司書、社会福祉士、社会福祉主事、保母などの職業資格を求めるニーズ」であり、「キャリアアップさせたい、場合によっては転職したい、退職（定年）後、新たな職業に尽きたいと希望している」タイプである。もう一方のパイディア型は「教養を高めるニーズ」で「社会人は日常的な仕事で失った自分とは違う別の能力や才能を開発したい。その意味で高度で普遍的な学習プログラムを求めている。」としている。このような社会人の学習要求は大学に向けられているが、現状の成人高等教育機関にはディレンマがあり、それを解決するには大学通信教育を成人向けに充実することであると指摘している（白石1998：175-85）。宮崎（2001：143-62）は成人期の生涯学習としてキャリア発達課題を示し、ミドルエイジ確立期における能力再開発とリカレント教育として通信教育が重要であり、通信教育においては、このよ

うな観点に立った指導が必要であるとしている。さらに、加茂（1999：73-82）は「社会人大学院生の便宜を図る工夫がいかなさなれようとも平日のアフターファイブの通学の困難さ」が残された課題であり、「最後の手段として期待されてきたのが、通信制で単位取得ができる大学院の登場である。」としている。

社会福祉の観点からは、一番ヶ瀬（1990：9）が「生活体験の積み上げが重要な意味をもつ福祉教育においては、生涯学習あるいは再教育の方が有効である面が少なくない」とし、「今後の大学の在り方のなかで、社会人入学やリカレント教育などを、どのようにうちたてるかは重要である。」と指摘する。佐々木（1998：36）は、「福祉関係者の生涯学習への注目は、ともすると教育関係者以上に大きいというユニークな事態も生じている。」とし、「高齢化への受動的・消極的対応として介護政策の充実があるとすれば、生涯学習政策の充実は高齢化への能動的・積極的対応というように考えられているのである。」と述べている。また、松岡（1998：94）は「近年、地域福祉政策の進行のなかで脚光を浴びている福祉教育であるが、いまだ個別の実践が林立しているに過ぎない。すでに指摘した課題を踏まえつつ、総合化・体系化される必要がある。それは生涯学習としての再整理・再統合を意味するものである。」と指摘する。さらに、鈴木（1998：127-29）は大学における社会人学生について、「教養指向の強い人もいれば、職業との関連で大学（大学院）へ入学する人もいる。社会人学生の進路という問題もこれまで以上に関心をもたれていい領域であろう。」としている。

2. 研究の目的

前述のように、社会人に対する生涯教育やそのための通信教育の意義、実施にあたっての一般的な留意点などについてはいくつかの先行研究報告を参考にすることができる。しかしながら、個別の教育・指導において、社会人を主たる対象とする通信教育では、特にどのような点に留意すべき

かについては、十分に検討されていない。たとえば、社会福祉士の養成課程で重要な社会福祉援助技術現場実習（以下、現場実習）では、指導を受ける者に対して指導者が複数いること（実習指導教員と実習先の実習指導者）、指導場所が学外であること、施設利用者との関係が重要であることなどから、通常の通学課程の学生の場合でも指導の難しい教育内容であるが、通信課程の社会人学生の場合に、特にどのような点について留意して指導していくべきかについては、これまでほとんど検討がなされていない。

本研究の目的は、社会福祉士養成課程を有するA大学の通学課程の学生（以下、通学生）及び社会人を主体とする通信課程の学生（以下、通信生）のうち、高齢者福祉分野の施設を実習先を選んで現場実習生を対象に、実習生としての特性・特徴、実習時の評価、及び、すでに取得している資格について調査し、両課程の学生を比較することにより、高齢者福祉分野における通信生への今後の現場実習指導の留意点や配慮点を明らかにすることである。

3. 研究方法

本調査は、A女子大学（以下、A大学）の発達教育学部福祉臨床学科（以下、通学部）および、通信教育部福祉臨床学科（以下、通信部）で、高齢者福祉分野での現場実習を行った学生を対象とした。A大学の通信教育部は、2006年4月に発達教育学部の児童教育学科と福祉臨床学科に男女共学制の通信教育課程として開設された。2007年度の通信教育部の在籍数は975人（女性750人、男性225人）で、福祉臨床学科341人（女性309人、男性32人）人である。通信生として初めての実施となる2007年度に現場実習を履修した学生は26人であり、うち高齢者福祉分野での実習生は11人であった。通学部での実習生に関しては、2006年の全現場実習生44人のうち13人が、2007年の全現場実習生40人のうち12人が高齢者福祉分野で現場実習を行った。そのうち、報告者の担当した11人（2006年6人、2007年5人）を通学生の調査対象とした。

調査対象の性別・年齢等の属性は、表1の通りである。

表1 調査の対象とした通信生および通学生の属性

属 性		通信生：通学生（％）
性別	女性	90：100
	男性	10：0
年齢	20代	38：82
	30代	25：18
	40代	12：0
	50代	25：0
全実習生に対する高齢者福祉分野での実習生割合		42：36

調査は、現場実習前に作成する「実習生個人票」、「実習計画書」等の現場実習関連資料からのデータの抽出と、現場実習巡回指導（以下、巡回）時の聞き取りにより行った。調査内容は、実習先施設の種別、巡回時の指導教官による実習評価、巡回時までの実習先指導者による評価、巡回時の指導事項や相談事項、実習生がすでに取得している資格である。

4. 結果

1) 現場実習先

通信生および通学生における現場実習先の分布は図1に示した。通学生のほとんどが特別養護老人ホーム（介護老人福祉施設）や養護老人ホームの入所施設を実習先としたのに対し、通信生では、老人デイサービスセンターやケアハウス、地域包括支援センターなど、多岐にわたっていた。

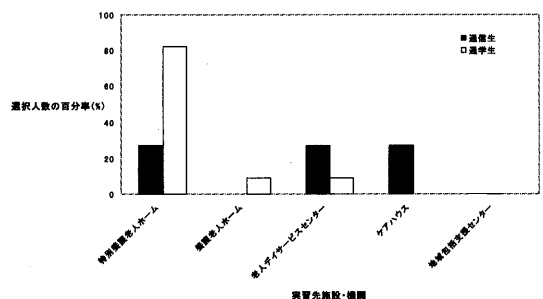


図1 現場実習先の比較

2) 現場実習巡回指導時の評価

A大学では現場実習中、実習指導教員が1施設

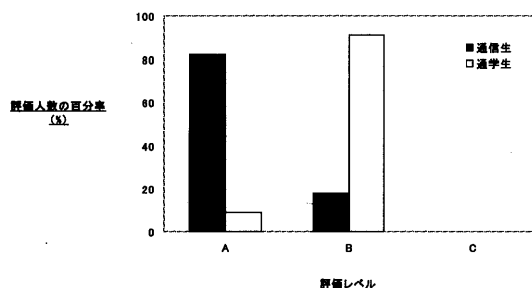


図2 実習の進行状況

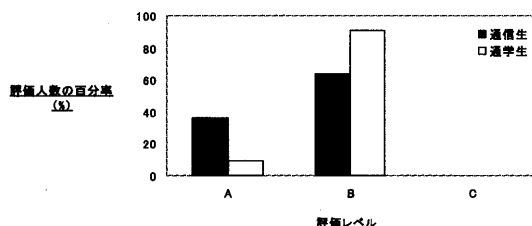


図4 心身状況

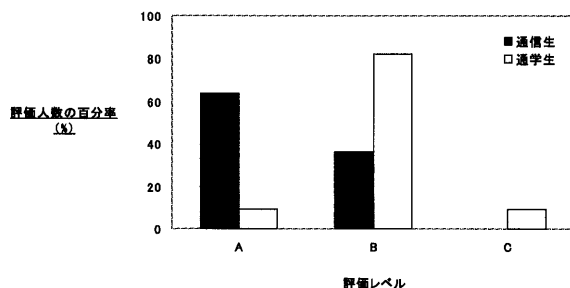


図3 実習指導者の評価

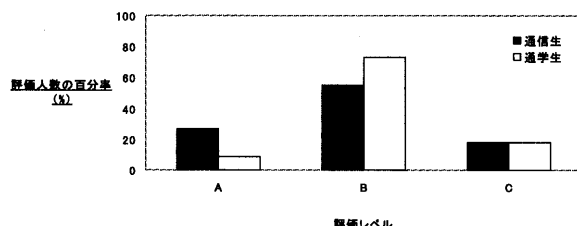


図5 実習日誌

につき最低1回の現場実習巡回指導に赴き、各実習生に対して、4つの項目、すなわち①実習の進行状況、②施設担当者の評価、③実習生の心身状況、④実習日誌について、A（順調）、B（普通）、C（要指導）の3段階で実習中の途中評価を行っている。本研究では、実習指導教員の違いによる評価の偏差をさけるため、同一教員により評価された結果のみを調査対象とした。

実習の進行状況の評価は、実習前に作成した実習計画書の記載内容を基準に、実習指導教員および実習指導者（実習先での指導者）により、実習で習得すべき目標の達成度を指標として評価された。図2に示すように通信生では実習内容の理解も早く、11人中9人でA評価となったが、これに対し、通学生では概ね計画書の記載内容に準じた実習がおこなわれているが、一部に不十分な点が見られ11人中10人がB評価であった。また、実習指導者も、同様に実習計画書に基づき巡回までの期間の実習状況について評価をしているが、指導教員の評価と同様な結果となっている（図3）。

図4には、巡回時に実習生本人が感じている心身状況に関して聞き取りを行った結果を示している。通信生では11人中4人が、通学生では11人中1人が心身状況は良好と自己判断しているが、前

述の実習成績ほどには両者間で差はみられなかった。さらに、図5の実習指導者と実習指導教員による実習日誌の評価では、両者ともB評価が主体となり、通信生においても通学生と同率で改善のための指導を要するC評価が表れた。

3) 巡回時における指摘事項、悩みや相談事項、及び良好と評価した事項

巡回時には面談を行い、実習生から実習状況を聴取するとともに、悩みや相談を受けた。面談の時間や進め方、質問事項、応答などではできるだけ一定の基準に従って行うこととし、通学生と通信生で差がないように配慮した。表2に示したように、指導事項としては両者とも、実習態度や実習日誌に関する指導が多く、悩みや相談内容では、通信生で職員と実習生の区別の困難さが、通学生では利用者とのコミュニケーションのとり方の困難さが悩みとして多く、実習日誌については内容の相談が両者とも多かった。また、良好と評価された事項として、通信生は真面目で積極的な点や現場経験の活かし方が顕著であり、通学生は真面目な態度と実習中も継続して実習に関する勉学を続けていることが挙げられる。

表2 巡回時における指導事項、悩みや相談内容、良好と評価された事項の比較

	通 信 生	通 学 生
指導事項	<ul style="list-style-type: none"> ・実習態度について；実習生としての学びの欠如，身だしなみ，緊張と固さの対応，実習先が勤務先であるための実習指導者や利用者への態度や対応，職員と実習生の区別の不明確さ，実習目標に合致した取組み方，知識不足，コミュニケーションの取り方 ・実習日誌について；内容と書き方，考察に至っていない点， ・その他；実習生の要望の伝え方，今後の実習先との関わり方 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習態度について；挨拶や言葉遣い，消極的で笑顔がないこと，利用者とのコミュニケーション不足，指示待ちであることの指摘，指導内容の正しい理解ができていないこと，職員への質問の仕方，課題への対応不足，メモのとり方 ・実習日誌について；誤字，内容，提出方法等，実習テーマとの関連，予習の必要性 ・その他；実習先でのボランティア活動，体調管理，実習生同士の情報交換
悩みや相談内容	<ul style="list-style-type: none"> ・実習内容について；今後の実習に関する希望の伝え方，認知症の方への対応 ・実習態度について；勤務経験と異なる緊張と戸惑い，家庭や仕事との両立について，職員と実習生の区別が困難 ・実習日誌について；職員視点となってしまう，考察にまで発展しない，時間がない ・その他；実習指導のみならず、通信での学び方等について、巡回を待ちわびている状況説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習内容について；実習受け入れの少ない実習先での戸惑い，利用者とのコミュニケーションのとり方 ・実習態度について；人見知りの性格，消極的な態度， ・実習日誌について；実習日誌を提出して帰るため短時間での書き方、具体的な書き方， ・その他；実習先の交通の便の悪さ，巡回指導により今後の実習に対する安心感と，具体的な取り組みや動きの理解
良好と評価された事項	積極的な取り組み，現場経験の活かされ方，保育士の経験がレクリエーション等で活かされている，反省や気付きに素直，実習日誌の評価，実習目標の視点の高さ，実習生同士の情報交換の活用，十分な基礎知識，適切な質問の仕方，真面目な取り組み	真面目な態度，視点の広さ，丁寧な言葉遣い，利用者にとっては孫世代に対する親身さ，実習中における勉学の継続

4) 取得資格について

両学生の取得している社会福祉関連の資格を以下に示した。通信生では25%でホームヘルパーの1級を取得済みであるが、通学生では取得しているものはいない。また、通信生では介護福祉士や社会福祉主事といった社会福祉関連の資格に加え、保育士や幼稚園教諭，中高教員免許などの教育関連の資格を取得している実習生が多かった。

(通信生:通学生) (%)

・ホームヘルパー 1 級	25 : 0
・ホームヘルパー 2 級	0 : 36
・介護福祉士	25 : 0
・社会福祉主事	13 : 0
・保育士	38 : 0
・幼稚園教諭	13 : 0
・中・高教員免許	25 : 0

5. 考察

本研究では、A大学の2006年及び2007年の現場実習生のうち一人の教員で担当できた学生を対象としたため、総数が22人と調査対象者が少ない。したがって、地域や年度ごとの特性等について解析することは困難である。反面、調査資料や聞き取り調査からの特性の分析，実習状況の評価，巡回時の面談は，全て報告者一人によって行われ，評価の一貫性が確保されている。今後，調査対象となる大学や養成機関を広げ，さらに一般化された知見の集積に努めていきたい。本稿では，上記の調査結果について項目ごとに考察を加えた。

1) 現場実習先について

両課程の学生とも過去の実習先に関するデータや居住地等を参考に学生自身が実習先を探し依頼

することとなっている。現場実習指導Ⅰで実習先の探し方や決め方等を指導し、みつからない場合は大学で過去の実習先を紹介する場合もある。野崎（2002：114）は「現場実習の課題を考える時、①場の問題（現場実習を受ける）、②人の問題（現場実習を指導する人）、③現場実習を希望する学生及び学生を出す側の3点から考えたい。」としている。現場実習指導上、場の設定が決まってから実習生個人々人への指導が始まることになり、高齢者福祉分野といっても様々な実習先を選ぶため、実習先に合致した実習指導が必要である。

本研究では、図1に示したように、通学生の多くが特別養護老人ホーム（以下、特養）を実習先に選んだのに対し、通信生は高齢者分野でも実習先が多岐にわたっており、特養と老人デイサービスセンター（以下、老人デイ）そして、ケアハウスが同率であった。通学生の場合、特養を実習先として選んでも、実際には入所の特養だけでなく、併設された老人デイでの実習が含まれることも多く、特養を選んだ通学生の多くは老人デイの実習も行っていると考えられ、入所と通所の両方の現場を経験することができている。一方、通信生では、老人デイや新しく実習先となった地域包括支援センターを実習先に選んだ者も多く、この場合は入所の利用者との関わりが少ない場での実習しか経験できないという特徴をもっている。通信生で老人デイや地域包括支援センターを選んだ割合が大きかった理由は今回の調査研究からは明確ではないが、入所施設でのシフト、例えば、夜勤や宿直等の不規則な実習時間を避けたことと、新しく実習先として社会福祉士の設置が決められた地域包括支援センターでの相談業務に関心が高かったことなどによると推察される。社会福祉士は相談援助業務を主とするソーシャルワーカーと位置づけられているのに、どうして実習先に特養があり、ケアワーク業務を経験しなければならないかという疑問に対し、相澤（2002：198-200）は、「介護・養護・療育といった主にケアワークが展開される場においては、ソーシャルワーク的アプ

ローチは不可欠だからである。」としている。高齢者福祉分野における現場実習に対して、通信生の場合には現職の内容も考慮に入れつつ、在宅福祉と施設福祉の経験を積むことのできる実習先を選ぶように指導する必要がある。

さらに、通信生については実習先の選択が2つのタイプに分かれていた。①実習先が勤務先である学生と、②勤務先とは違った高齢者施設を選んだ学生である。ここで①の場合は、職員と実習生という取り組み方の違いを明確にできないという問題点が顕著に表れた。それは、実習先の指導者も同様で、実習生として指導しようと心がけて下さったが、やはり、同僚あるいは職員としての接し方になる場合があるという指摘もあった。実習生が実習指導者を君付けで呼んだり、言葉遣いも同僚への対応である場面等が報告者の巡回時にもみられた。それに対して、②の学生は、勤務先ではないため、自分の職場や違った福祉分野と比較しながらも貪欲に学ぼうとする実習生としての態度が見受けられた。また、就労経験や社会人経験が言葉遣いや態度に活かされており、社会福祉現場での実習にプラスとなっていた。

以上のように、通信生においては入所施設を選択しない傾向があるため、幅広い実習経験を与えるという点で偏りがあること、就労経験を活かすことのできる実習先を選択すること、実習生の現在の職場を避けることなどが留意点としてみえてきた。

2) 現場実習巡回指導時の評価について

図2に示した巡回時までの現場実習の進行状況については、通信生では11人中9人がA評価であり、通学生に比べ、通信生の方が順調に実習を進めていることがわかる。面談においても、通学生は初めての現場実習に対する緊張や戸惑いが強いようである。前述の野崎（2002：116）も「ここ数年、現場で学生を見ていてあえて思うのは、知的には高いものを持っていたとしても、社会性の未熟な学生、現場理解のできていない学生が増えていることである。」と指摘している。通信生の場合、

社会人経験や就労経験等が作用し、順調な実習開始をもたらしているのではないだろうか。例えば、挨拶や質問の仕方、利用者や職員への適切な対応が自然にできているようであった。また、実習目標の達成度に関しても、より専門的な目標を掲げた通信生の方が質問や要望を実習指導者に投げかけており、そうした積極性は評価できる。

施設で実習指導を担当して下さる職員の巡回時の評価（図3）についても、通信生はA評価が、通学生はB評価が半数以上を占めており、前述の教員による進行状況の評価と同様の結果となっている。通信生については、まじめな取り組みや社会人経験が評価され、一方、通学生では、社会人経験がないことでかえって実習生としての素直さやまじめさが評価されている。学生の社会性の未熟さを指摘した野崎（2002：84，85）は、実習中の注意事項19項目の中で「⑦学生として若々しく振る舞う」ことを挙げている。この点は、通信生が現場実習生であるという自覚を強めるためにも必要な項目かもしれない。また、高齢者施設では、本実習だけでなく、様々な実習を受け入れている。実習生自身の自覚は特に重要なのである。

心身状況に関しては、前2項目と異なり、両学生ともB評価が大半を占めることが特徴である（図4）。両学生とも健康管理には留意していたが、社会人・就労経験が有利にはたらくとはいえないようであった。通信生では、実習時も仕事や家庭との両立が求められるケースも多く、かえって心身の疲労は蓄積されるかもしれない。勤務先や家庭の了解や理解が大変重要であり、そうした事前の環境整備が通信生の現場実習には不可欠である。これは、通信、通学生を問わず現場実習指導時に特に必要な事項として心がけているが、今後は、通信生において実習を順調に継続していく上で必要な特徴的な環境要因を探る必要がある。

現場実習において教員による巡回指導は重要であり、通信生、通学生を問わず、巡回を通して心身ともに落ち着くことが多い。特に、通信生とは教員が対面する機会が少ないためか、巡回を待ち受けている学生が多く、巡回の重要性を通学生よ

り、強く感じた。通学生と異なり、通信生では実習地域が遠方の場合も多いため、直接訪問する巡回のみならず、電話やメール等での実習中指導も今後の課題となろう。

実習日誌に関しては、両学生ともA評価が少ない（図5）。また、この項目のみC評価の通信生が見られた。その日の実習を振り返り、感想から考察に深め、適切にまとめて記述するという作業に対して、差はないようである。特に、通信生は通学生に比べ、実習日誌の評価の高い学生と低い学生との差が大きいことも特徴であり、実習生としての視点ではなく職員サイドの視点から記されているという指摘もあった。この指摘は、実習指導者や報告者のみならず、通信生本人も自覚しており、通学生よりも短時間の実習事前指導において、いかに効果的に指導していくかが問われているように思える。実習日誌については、両課程の学生共に巡回時に改めて指導時間を要することも多いが、やはり、実習開始前の十分な指導が必要である。通信生に対しては、対面での指導時間が少ないため、実際に事例を想定したブレ日誌等のレポート指導の必要性を感じる。また、社会人経験があるからといって、誤字・脱字、不適切な表現に関しては、通学生と変わらない点も多く見受けられた。そうしたことも教員が理解したうえで、指導が必要である。

以上、4項目について考察を加えたが、表2では、聞き取り調査を基に、巡回時の指導・評価事項を具体的に記した。通信生についてみると、前述したように、職員と学生との区別や対応に苦慮している学生がいる反面、それを克服している学生もいることがわかる。今後、実習振り返りや、実習生へのオリエンテーション等で学生の現場実習体験談を披露し、職場での実習について考え、指導することも重要になろう。また、実習生としての不適切な態度や身だしなみを指導した学生がいることから、社会的常識をすでにマスターしているであろうと通信生をみるのではなく、通学生同様、実習前に基本的事項やマナーの確認は怠ってはならない。

3) 取得資格について

圧倒的に、通信生が多様な資格を取得している。通学生よりも年齢が上で、社会人・就労経験を有する通信生であるため当然であろうが、この資格が本実習でどれほど有効であったかは考察できていない。前述の実習進行状況でも、通信生の方がスムーズに実習を開始できているが、有している資格や社会人経験がどのように作用しているのか等の分析は行っていないため、今後、通信生への指導に役立てるためにそうした分析も必要と思われる。また、通信生の場合、有資格者であるために進学した学生もあり、進学の動機を明確にすることにより、今後の学習意欲を高め、学習継続のために活かすこともできよう。

以上の考察から、通信生の現場実習指導においては、①実習生としての自覚をもち実習での学びを深めるために、さらには、実習先での職員との関係を、実習指導者と実習生として明確にするためにも、実習生自身の職場での現場実習はできるだけ避け、実習生のキャリアに対応した慎重な場の選択を行う、②社会人経験や就労経験が活かされるように配慮しつつ、実習生としての素直さや若々しさをもつように指導する、③社会人であることに安心せず、身だしなみや言葉遣い等、基本的な指導を怠らないようにする、④心身の健康に留意し、実習生の家庭や職場などの理解を求め、実習を継続できる環境の整備を進める、⑤実習日誌に関しては、通学生同様、十分な事前指導と事前学習を行う、などの点に留意することが必要であるといえる。

6. 結語

高い専門性と豊かな人間性が求められる社会福祉士の養成において現場実習は重要であり、その高度化に資する研究はますます必要性を帯びている。加藤（2007：177）は「大学がリカレント教育の機会を広げることが現実的かと思われる。」ので、「オンデマンド化を含む通信教育（学部、大学院）の拡充」が望まれるとしている。また、原田（2007：215）は「さらに将来的には、生涯

学習機関としての大学における福祉教育の位置づけが問われるようになるであろう。」として、「リカレント教育として福祉系大学が担う役割は大きい。」と強調する。社会経験や就労経験をもち、特に社会福祉を学び、社会福祉士を目指そうと入学した多くの通信生に対し、これからも学生の特性を活かした教育体制の構築に資する研究が必要である。

引用文献

- 独立行政法人 国立印刷局発行（2005）「平成17年度 学校基本調査報告書（高等教育機関）」、14。
社団法人 日本社会福祉教育学校連盟（2008）「社団法人日本社会福祉教育学校連盟 会員名簿」3-179。
（財）社会福祉振興・試験センター（2008）「試験・社会福祉士 養成施設一覧」
（<http://www.sssc.or.jp/shiken/index.html> 2008. 7. 10）
白石克己（1998）「第Ⅲ部第2節 通信教育—社会人への開放は可能か」小野元之・香川正弘 編『広がる学び開かれる大学』、175-185。
宮崎冴子（2001）「21世紀の生涯学習—生涯発達と自立—」、143, 144, 160-62。
加茂英司（1999）「第四章 通信制大学院とインターネットの活用」村田治編『生涯学習時代における大学の戦略—ポスト生涯学習社会にむけて—』、ナカニシヤ出版、73-82。
一番ヶ瀬康子（1990）「第1章 社会福祉専門教育の展開と課題」一番ヶ瀬康子・小川利夫・大橋謙策編『シリーズ福祉教育6 社会福祉の専門教育』光生館、9。
佐々木英和（1998）「第2章 人間の発達と学習内容」倉内史郎・鈴木真理編『生涯学習の基礎』（株）学文社、36
松岡廣路（1998）「第5章 女性の生活と生涯学習」倉内史郎・鈴木真理編『生涯学習の基礎』学文社、94
鈴木真理（1998）「第8章 学校による生涯学習支援」倉内史郎・鈴木真理編『生涯学習の基礎』学文社、127-129
野崎明子（2002）「第3章 実習現場での学習」米本秀仁・牧野田恵美子他編『社会福祉選書11 社会福祉援助技術現場実習』114, 116, 84, 85
相澤譲治（2002）「特論 社会福祉援助技術現場実習に必要なケアワーク」米本秀仁・牧野田恵美子他編

『社会福祉選書11 社会福祉援助技術現場実習』
198-200

加藤幸雄 (2007) 「第3部 社会福祉専門職の養成と将来展望 第1章 社会福祉専門職像と専門職養成」
宮田和明・加藤幸雄他編『社会福祉専門職論』177

原田正樹 (2007) 「第3部 社会福祉専門職の養成と将来展望 第3章 福祉教育における社会福祉教育の位置」宮田和明・加藤幸雄他編『社会福祉専門職論』215

ABSTRACT

Research was carried out to clarify important considerations at the guidance of social work field practicum for students in a correspondence course (distance education) of the social welfare faculty of university. A total of 22 students was surveyed for their characteristics, their performance in the field practice, the advice and instructions given, and the certificates and licenses they have. The results indicated that, in comparison with students in the on-campus course, those in the correspondence course were older, working at other institutions, and had some certificates and licenses. It also became clear that the following points should be considered at the social work field practicum for the correspondent course students; 1) to ask the students to select institutions other than where they are working, in order to ensure that the student participate as a trainee, 2) to facilitate the use of their life and work experience for field practice, 3) to give suitable guidance on appropriate behavior and dress code, 4) to make the students realize the importance of taking care of their health, and the necessity of the understanding and support of their family and colleagues, and 5) to give suitable instructions for maintaining a field note, at a similar level as the students of the on-campus course, at a pre-practicum guidance and self-study class.

Key words

guidance of social work field practicum, correspondence course, university students, a working adult